

# 被災の自閉症児ら招く

みんな、居ても立ってもいられなかった。

4年前の3月、遠く離れたまちで起こった東日本大震災は、放射線被害につながる原発事故をもたらしていた。「たいへんなことになっていくみたいだ」「何かしなければ」。当時、宇部市内であった福島から山口市に避難してきた家族の話を聞く会では、そんな声が飛び交った。

この会には、チェルノブイリ原発事故の被害に遭った子どもたちの支援にかかわった経験がある武永佳子さん(69)らと、自閉症児とその家族を支援してきたグループが参加していた。

原発事故は長期の避難生活を強いる。だが、自閉症児は見知らぬ人たちとの共同生活が苦手だ。パニックになって周囲に迷惑をかけるのをおそれ、避難所に入らず車中泊で過ごす家族がいるとの報道もあった。

## 福島の子どもたちとつながる宇部の会

るはずだ――。「福島の子どもたちとつながる宇部の会」は、こうして立ち上がった。

2011年夏、7家族を宇部での1週間の保養に招待した。福島市に住んでいた古和田扶美さん(50)は、中学生と小学生の男の子を連れて参加した。うち1人が自閉症児だ。

古和田さんは「昼休みに校庭で遊ぶことが心の安定のよすがだったのに、放射線量が高い福島ではそれを禁じられ、元気がなかった」と振り返る。宇部では外を走り回ったり、プールに入ったり。生気を取り戻していく様子が手に取るようにわかった。事故を受け、移住の誘いは数多



福島から招いた子どもたちと砂遊びをする学生ボランティア＝昨年8月、宇部市。福島の子どもたちとつながる宇部の会提供

## 経験生かし保養の場

くあった。だが、自閉症児を積極的に受け入れるところは皆無だった。仕事で福島に残らざるを得ない夫は遠方への移住に反対だったが、古和田さんは「自閉症児に理解のある人たちの支えは何物にも代え難い」と譲らなかつた。

同会はこれまで計5回の保養事業を実施。昨年は3家族8人が参加した。中学生から80代までのメンバーらが参加家族の世話をしたり、甲状腺検査や専門家によるカウンセリングを実施したりしている。

保養事業への参加後に宇部へ移住したのは3家族。いまでも古和田さんら2家族が暮らす。代表の橋本嘉美さん(62)は福島に戻った家族とも連絡を絶やさず、「福島の子どもたちとのつながりを、ずっと保っていききたい」と話す。

「普通の暮らしがこんなに有りがたい」と古和田さん。同会では今年も2家族を迎える予定だ。(大野博)



今月11日の例会ではキャンドルをともし、東日本大震災の犠牲者に黙禱(もくとう)を捧げた＝宇部市の市総合福祉会館